

# 諸問題解決に向けた社会的基礎土壌づくり、ダイジェスト

2025.03.20to

社会的基礎土壌 コミュニケーションのコミュニティ 街・人間環境

**1. はじめに 1.1 目的** ; 近年、市民を取り巻く環境には、街・地域を含め居住環境の質低下が構みられ、また地球規模でも気候変動を含め環境危機問題があり、早急な対応に迫られてもいる。それゆえに、問題への対処には英知を結集して取り組むことが求められている。

本稿では、上記取り組みに向けた諸問題への対処の前段階として社会システムや市民の在り方を社会的基礎土壌として論を展開する。具体的には、市民の思考・行動・感性に着目する社会的基礎土壌のあるべき姿を展望し、その核となる(人間環境を含めた)街やコミュニケーションのコミュニティについて(主に富山を対象に)現状を論考する。

**1.2 本論の立つ位置** 著者は諸問題への対処にはタスクフォースのアプローチも良いが、これとは別に(社会的治癒というべき)レジリエンスが期待されるべきであり、これを可能にするのが社会的土壌の醸成と考えている。すなわち、事に当たる前段階での社会のパワーが社会的基礎土壌からの滲み出てくるとする。そして次の段階として、著者は総合・統括による大々的アプローチではなく、地道で人類全員が携わるアプローチが肝要とし、日常生活からの沸き上がるパワーそのものに期待して、これらの構成要素を以下のようにする。なお文中で個々とは個人や個別のこと、社会的基礎土壌を単に基礎土壌や基礎体力とする。  
・小規模な地域における生活の営みには、地域民の思考・行動・感性が日常的に発揮され、これが地域民の足元からのパワーとなり、地域より上位にある大規模系(自治体、都市、国のこととす)にはボトムアップ(積み上げ)として機能することが可能。  
・これには、コミュニケーションと思考・行動・感性の体験が核として、コミュニケーションのコミュニティ(以後コミュニティ)と(人間環境含む)街づくりとなって社会的存在となる。また、暮らしの人権観も自然と沸き上がる。

・大規模系には規模に見合った社会活動の推進のための組織論理(社会構成論理;大規模系維持や生産活動)がしばしば市民論理と相反。何とか市民論理と併存となるよう論理構築要現実問題として、街づくりと都市づくりの間を埋めたい。

**1.3 市民主導構想** ・種々の施策には市民の声が反映されにくく、パブコメや説明会(行政主導の市民会議も)では不十分さが否めない。施策の前段階にて市民の力を発揮させるために、基礎体力醸成と市民主導の活動が必須と考える。

・市民主導の在り方として、諸問題への市民のコミットをどう図るか。このため、諸問題展望として市民視点の明確化を図り、危機対応の前段階における準備を以下のように設定する。  
・市民の感性からの思考・行動、  
・問題構成の明確化  
・社会健全化、  
・諸問題の共通する根源(根っこ)、市民の潜在的ポテンシャル向上を図り市民運動へと展開。

**2. 社会の諸問題とその捉え方 2.1 諸問題の根源** 現行社会における不都合には過度の分業・専門分化、事象の

関連性分断化等があり、人間環境でいえば人間関係希薄化、均質化、同調圧力等があり、一般環境でいえば、生活居住環境質低下、自然環境破壊、歴史・歴史遺産軽視(建物含)等がある。

**2.2 市民側の基礎体力(基礎土壌)** (1) 諸問題への市民の対応 ;  
・諸問題への関わりにはいくつかの場合がある。諸問題により直接被害を受ける、被害者支援並びに不条理解消を目指す積極的推進者、諸問題には傍観含め観察的な出会い。

(2) 市民活動 ; 観察・傍観の市民をより多くの力が目指されている。一方、市民側では、問題の関心が低いようにみえるが、そうではなく、問題に関する思考・行動が沸き上がってこないだけという現状がある。ではどうする。これまでのように、社会のあり方、専門家との協働、市民レベル向上、といった個人を取り巻く環境の充実化が図られており、専門体系を背負う専門家との連携による対応が期待される。

(3) 感性・感覚 ; 世の中、「社会は変だぞ」、「街の先行きがおかしいぞ」といった異変の感覚もあれば、「これはいい、あれはこうである、素晴らしい」という感覚もある。これらは共に市民感覚の研ぎ澄まされた様相であり、市民の基礎体力そのものとなって日常生活の営みとして感覚感性を市民自らが磨いている。

(4) 基礎体力の発揮 ; 発揮先は何といっても街づくりであり、その先は社会である。街づくりでは、暮らしがコミュニティと一体となってそこに情熱が集積され、市民社会がつけられていく。

**3. 社会の諸事情と社会健全化 3.1 市民と専門家の考えや行動** ; 専門家には、専門行為に際して事業目的や組織論理が背景にあるために、思考や行動には理性や知性に基づいているものの限界がある。これに対し市民においては、社会の底流を成す社会意識(常識や慣習等)のもとであっても、思考や行動には自身の感性や感情を基本にしており、これをもとに次の段階として理性的な思考や行動に繋がっていく。一方、社会においては、市民と専門家の二者は相対立することがあり、社会運営構成原則には組織の論理をもとにした専門論理が主体となるだけに、市民の論理がしばしば霞みがちだが、組織論理が強く大きく立ち代かれないなら、専門家の市民への受けぶりや市民への寄り添いが見られる。

**3.2 感性と知性** ・市民の知性・感性の土壌 ; 感性が何事にも先行しかつ認識も感性的であるので、知性についても感性先行となる。  
・各種知識には、細く緩やかな繋がりをもち深まりよりも広がり特徴であり、そこには網羅・包括はなく、統合・総合もないといえる。

**3.3 感性からの行動** 行動の源には感性からの衝動や情熱があるとして、これが欲望、意欲、情熱、理念理想、打算、メソッド、他となって現れ、行動が思慮や欲望を伴って感性と連動。  
・商業モードにのせられた行動 ; 感性が鈍化と捉える。

・安定志向の行動 ; 生活の安定・豊かさ・充実を求める安定定

志向。環境改変(改悪)について危険と捉えている。

- ・ 理念的情熱的行動；情熱的欲求の喚起で感性的行動へ。
- ・ 無償の行動；感性による行動は無償行動。理性的範疇では行動はそもそも有償だが、感性が入り込むと無償にも。
- ・ 無関心行動；予防的や思考停止からの無関心化。

**3.4 市民側の環境** (1)人間の位置づけ； 推進側の生産性向上や利益追求の論理は、関連する組織や体系そのものにも社会ニーズや時代ニーズに応える加速と制御を行使している。

推進側の市民への対処については、人間の感性や感情が数値に乗らないだけに数理管理が実に都合が良いとされている。ただし推進側は市民側を感覚的な社会モードで取り込んでいる。

(2)市民の教育環境； 教育環境には学校施設の近代化や技術革新の恩恵を受けていても受験競争は依然変わらず、格差社会を支える教育体制も改善されていない。批判精神の無いモノ言わぬ人間育成が依然進められており、理工系の最新教育のもとに、社会系・人文系の軽視の風潮が根強い。教育は歴史真実のもとにした歴史を教えず、市民には事の本質に触させず、社会モードに乗せれば十分と。学校統廃合が少子化により進行。教育の在り方に迫る議論はほとんどなし。少ないながらも小規模校では子ども視点で子どもに優しい教育が実施されていて、子どもが生き生きと生活を営んでいる。

**4. 健全化に向け組織の論理** 4.1 つくられる社会モード 推進側主導により TV や SNS 等のソーシャルメディアを介してつくられる社会モードについては、管理社会のもと同質化に加えて格差容認が市民側に押し寄せている。社会モードには「市民へのかまい過ぎ」あり。市民のニーズの先取り・需要創出として、消費行動促進というサービスイノベーションがかまい過ぎとして定着。本来はニーズ・発想は市民主体である。

4.2 暮らしのありのままがセオと気づき・学びに (1)市民センス(市民感性・感覚)；市民(社会)センスとは、暮らしという社会活動を通して磨かれ蓄積され身に付いた感覚の総体である。これより、社会のあり方や地域の在り方等に思考や行動の源としてセオが発揮されることになる。

(2)暮らしからの気づきや学び；人間教育としては、学校教育のように効率教育そのものを目的とした組織教育もあれば、特別に目的としない教育(教育というよりも健全な暮らし)もある。後者には、家庭における暮らしの中での気づきや学びがある。これを可能にする環境づくりが要。(成人素養形成の源)

**4.3 市民力行使**・顔の見える活発なコミュニティ。これは良好な環境(特に風土)が必要。環境づくりが肝心。コミュニティ同士の連携によるネットワークとしてのコミュニティも。人間環境の充実として交流圏の拡大。そこにおいては自由闊達な議論と交流あり。

**4.4 市民の活動** 市民活動には個人レベルのもの組織レベルのものがある。また組織運動にも二つあり、第一は市民の要求を勝ち取るという先鋭的な市民運動であり、第二は市民と近い普通の組織が市民個人を取り込む運動である。

**5. 足元からの市民運動** 5.1 市民系の思考から学へ 市民の思考と行動の一体化；感性からの思考・行動の背景をなす思考体系において、理性的展開を進めるには思考と行動の一体化を狙って、市民が自ら社会を念頭に思考することを市民哲学

や市民社会学として位置付けることにする。これらは、街づくりの理論的バックボーンの根幹として受け入れられている。

**5.2 運動の形態** 運動(改善運動)の形態には三種あり。本稿では下記項(3)の様相を念頭に置く。

- (1)社会全体での運動；大規模な民主主義運動。
- (2)問題別市民運動；環境改善の大運動・闘争には、市民からの広がる連携でもって各個撃破の勢いで取り組み。
- (3)広範な市民活動；市民の知性土壤による社会意識の充実化。生活の営みの延長により市民意識を積み上げた活動。

**5.3 ごく自然体で** (1)環境危機問題に向けての取り組みとして「自然体での市民生活ありき」や「市民生活の営みの延長に都市や社会がありき」をもとに基礎土壤づくりを考える。

- (2)変革に向け；変革というよりも街づくりを基本。なぜなら日常的に「あるがままが足元から」沸き上がっている場が街。
  - ・街づくりは市民のあるがままに構成できる。
  - ・気づきや学びや良い体験の積み重ねが小規模な街では可能
  - ・コミュニケーションのコミュニティとしては街の中でコミュニケーションが行き交う自由闊達な場や各家庭や小さな職場のコミュニティを支えている。

**6. コミュニケーションのコミュニティ** これには家庭や街はいうに及ばず職場や学校などでのコミュニケーション場がある。特に市民向けには、暮らしの一環として知的交流(コミュニケーションのコミュニティ)の場においては、場運営が市民主導として展開され、知的コミュニケーション「朝活」と「カフェ」が人気高である。そこでは、人間の生き方から時事問題まで広範囲なテーマにて市民社会の素養向上を結果的に担っている。それともう一つ。専門的テーマの研究会でも、自由闊達を保持している市民のコミュニティが支援され、カフェ文化が市民の知性のオアシスとなっている。なお、朝活やカフェは朝活富山、朝活 Zoom、哲学カフェ、社会科カフェ、憲法カフェ、子どもの場、他多数

- (1)コミュニケーションのコミュニティの場とチャンスが日常化し広がることやコミュニティにおける対等感と各自の作り上げ感により、市民は(どの年齢層も)コミュニティに期待をもちかつコミュニティの良さを実感。
- (2)問題の根源からの市民思考は語り合い(コミュニケーション)を基礎にしている。これがコミュニティをつくり、どんなコミュニティであっても社会的基礎体力づくりそのものとなる。

**7. 街づくり** 基礎体力形成に向けて街づくりの果たす役割(人間環境形成として)を富山でのいくつかの実践例にて検討。

- (1)街づくりが基礎土壤に転化できる要因 地域一体で家族的コミュニティ(八尾)、中山間域でゆっくりにわか居住(大岩山間)、街の風情を街づくり協定(井波)、市民の拠り所となる風情ある大規模建造物(滑川)、地味に町衆で守る気風(吉久)、訪問時記憶を訪問者各自宅に持ち帰り(井波)、訪問者と環境とが一体で思い入れ(大岩一軒村)

(2)街づくりから基礎土壤へ；街においては都会も田舎も対等であり、自律があり、「個からの始まり」や「足元から」といった所からの社会があるといえる。(そこには人間環境の形成)

**8. まとめ** 諸問題の解決に向けてた問題対処行動や問題別広範行動を支援する場合、行動・運動の前段階における市民側の活力(基礎体力)が大きに期待できると考え、ここに基礎体力及びその周辺のあるべき姿を明らかにした。

なお、本稿では諸問題への解決を即目指している訳ではなく、解決に向けた市民基礎体力を養うことに重点を置いている。これによって社会的なセオが磨かれ、社会の不条理を的確に捉えることで問題解決への準備として勢いが増すことになる。

**謝辞** 本稿は皆さんの討議の賜物。議論いただいた各位に感謝します。